

千里丘遺跡

都市計画道路千里丘三島線道路改良事業に伴う調査

はじめに

大阪府摂津市は、豊かな自然や歴史的遺産に恵まれた地域です。その一方で、大阪市の中心部まで電車で20分ほどという利便性から住宅地としての開発もすすみ、急速な変化を遂げてきました。大大阪であった大正期には東洋一の貨物輸送拠点とうたわれた吹田操車場の建設、戦後日本の復興を証明する昭和45年の大阪万博など、日本の近代化を象徴するような出来事もここ千里丘周辺の地で数多く起こりました。

昭和13年に開設されたJR千里丘駅や、駅の開設以前に設置された小坪井架道橋についても、駅前開発にともない平成17年度より調査を開始しました。平成17年度調査の結果、調査区域の地下部分はさほど損壊を受けておらず、縄文時代の石器集積から古代・中世の耕作痕や掘立柱建物、近世以降の耕作痕に至るまで、長きにわたってこの地域に人々が居住していた痕跡が残されていたことを確認することになりました。平成18年度の調査でも、継続して古代・中世の耕作や掘立柱建物の痕跡を確認することができました。

このような調査成果を得たことで、この地に恵まれた豊かな自然と歴史遺産がいまだに残されていることを再確認し、利便性のみならず、地域府民のより豊かな質の高い生活環境と文化を積極的に創出するために役立てていけるものと信じています。

上記の成果を得た調査の実施にあたっては、摂津市教育委員会、茨木土木事務所、地元自治会各位をはじめとする多くの関係者の方々にご協力いただきました。深く感謝するとともに、今後ともこの地における文化財保護行政をご理解、ご協力をお願いする次第であります。

平成20年 3月

大阪府教育委員会事務局文化財保護課長
富尾 昌秀

例言

1. 本書は、大阪府教育委員会が、大阪府都市整備部の依頼を受け、都市計画道路千里丘三島線道路改良予定地について平成18年度に実施した摂津市千里丘1丁目所在、千里丘遺跡の発掘調査報告書である。
2. 調査は、文化財保護課 調査第一グループ 主査 一瀬和夫、技師 小川裕見子が担当し、遺物整理は調査管理グループ 主査 三宅正浩、技師 藤田道子が担当した。
3. 調査に要した経費は、大阪府都市整備部が負担した。
4. 調査の実施にあたっては、摂津市教育委員会、大阪府都市整備部、茨木土木事務所をはじめとする諸機関、諸氏の協力を得た。
5. 本書の編集は、小川が担当し、執筆は調査担当者及び参加者等が分担した。
6. 本書に掲載した遺物写真の撮影は、有限会社 阿南写真工房に委託した。また、航空写真測量については株式会社アコードへ委託した。
7. 本調査の調査番号は平成18年度06061である。
8. 本報告書は、300部を作成し、一部あたりの単価は448円である。

目次

はじめに

例言

目次

第1章 既往の調査	1
第2章 調査に至る経緯	3
第3章 平成18年度調査区調査成果	4
第1節 基本層序	4
第2節 各遺構面の調査成果	7
第3節 出土遺物	13
第4章 千里丘遺跡平成17年度調査出土土器について	15
第5章 まとめ	20
写真図版	

報告書抄録

千里丘遺跡

都市計画道路千里丘三島線道路改良事業に伴う調査

第1章 既往の調査

平成17年度、大阪府教育委員会が調査を行った千里丘1丁目遺跡第2地点は、縄文時代から近世にわたって存在した複合遺跡である。近世以降の遺構として、溜池もしくは流路と見られる遺構、耕作の痕跡である溝、柱穴と見られる建物の痕跡、土坑などが検出され、土師器・須恵器・瓦器・陶磁器片が出土している。中世の遺構として、ほぼ東西方向にそろう鋤溝群、土坑、柱穴が検出されている。建物の痕跡と見られる柱穴からは、ほぼ南北方向を主軸とする掘立柱建物群が8棟まで存在した可能性がある。同検出面から土師器・須恵器・瓦器・陶磁器片などが出土している。古代以前の遺構としては、奈良～平安時代にかけてのものと見られる流路、溝、牛によると見られる足跡、馬鍬の跡と考えられる溝、鋤溝、柱穴が検出され、須恵器・土師器・黒色土器（内黒）・瓦の破片が出土している。ほぼ同じ水準において、縄文時代のものと考えられる地層から130点を超えるサヌカイト製石器の集積を検出し、縄文土器の破片も出土している。

平成18年度調査区の南に位置する千里丘2丁目遺跡第1地点は、平成9年度に摂津市教育委員会により試掘調査が行われた。その際、最下層に河川氾濫の堆積が、またその直上から中世のものと考えられる瓦器・土師器片を含んだ耕作土の堆積が確認された。その耕作土内からは弥生時代中期に属する打製石鏃、縄文土器などが出土しており、同時代の遺跡の存在が示唆される。また、今回の調査区の南西に位置する千里丘2丁目遺跡第2地点では、平成10年度に同じく摂津市教育委員会による立会調査が行われ、遺物包含層と土坑を検出した。

JR千里丘駅東口前（現・フォルテ摂津）には平成11年度に調査が行われた千里丘東2丁目遺跡が存在する。ここでは奈良～平安時代の耕作痕が検出され、陶磁器・土師器片が出土した。この遺跡の南に位置する千里丘東3丁目遺跡第1地点では、平成9年度に摂津市教育委員会が立会調査を行い、包含層が確認され、中世の土師器・瓦器の小片が出土した。千里丘東2丁目遺跡のさらに東には、昭和48年の地区公民館建設工事の際に発見された千里丘東1丁目遺跡が存在する。工事の際に除去された廃土からは、須恵器・土師器・瓦質土竈・近世瓦・茶釉磁器片・糀などが採集された。表土下約110cmの深さからは、須恵器の大甕も発見されているが、遺跡の性格は不明である。遺構としては溝、もしくは土坑と見られる幅40cmほどの掘形が検出された。

今回の調査区とは少し離れるが、周辺には弥生時代から戦国時代にわたる時期の堆積層が確認された明和池遺跡や、サヌカイト破片が出土した蜂前寺跡が存在する。

明和池遺跡は庄屋一丁目に位置し、昭和62年に発掘調査が実施された。このときの調査において弥生時代から戦国時代にわたる時期の堆積層が確認され、各堆積層中から土器などの遺物が

多量に出土した。他に中国からの輸入青磁や白磁、北宋銭なども出土し、特に丸鞆の出土が注目される。この丸鞆の出土により、朝廷に出仕していた役人の存在が伺える。弥生時代の堆積層中からは土器片や古墳時代前期まで残る河川の跡を検出した。また、鎌倉時代から室町時代にかけての掘立柱建物跡、戦国時代の大溝を検出している。

蜂前寺遺跡は平成9年度に試掘調査が行われた。その後の立会時には須恵器甕体部が出土し、近世の土坑からは寛永通宝及び鉄鏃が出土している。

蜂前寺跡第1次調査では14世紀から15世紀にかけての瓦を含む東西の溝が検出され、平成12年度に摂津市教育委員会によって行われた第2次調査では、東西に流れる溝跡・縦柱建物跡・庇付き掘立柱建物跡・土壙墓・井戸などの遺構が検出された。遺物としては中世を中心とした土器などが出土しており、溝の中からは中世以前のサヌカイトの破片・弥生土器片・古墳時代の須恵器・土師器などが出でている。以上から遺跡の性格は寺院跡・集落跡と見られる。

(大向 智子)

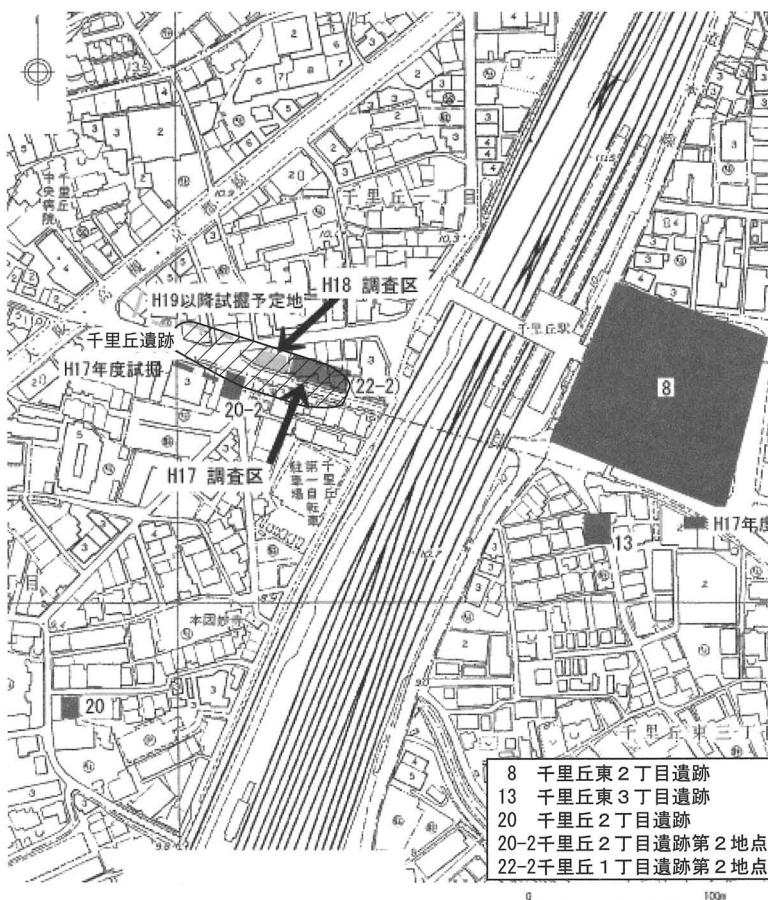


図1 既往の調査位置図

[参考文献]

大阪府教育委員会 2006『千里丘遺跡群発掘調査概要』

(財) 大阪府文化財調査研究センター 1999『吹田操車場遺跡』

摂津市教育委員会『郷土摂津いにしえ通信』第 50-52・62-64・74・99・100号』

摂津市史編さん委員会 1977『摂津市史・本編』

摂津市史編さん委員会 1984『摂津市史・史料編 1』

第2章 調査に至る経緯

大阪府摂津市域は、大阪市の中心部まで電車で20分ほどという利便性から住宅地としての開発もすすみ、急速な変化を遂げてきた。平成17年度から行われている当該調査地周辺においても、昭和13年に開設されたJR千里丘駅や駅の開設以前に設置された小坪井架道橋も駅前開発にともない、まさに今、大きく様相を変えている。

平成18年度の調査は前年度に引き続き、都市計画道路千里丘三島線道路改良事業とJR千里丘駅前再開発事業にともなうものである。線路をくぐってJR千里丘駅東口と西口とを結ぶ小坪井架道橋の拡幅工事が都市計画事業の一環として大阪府茨木土木事務所により計画され、平成3年に事業認可された。現在、小坪井架道橋は片道一車線の狭路で交互信号が設置されている。府道大阪京都高槻線へ抜ける当該道路は比較的交通量が多く、信号待ちの時間が渋滞を引き起こす原因になっている。工事は平成21年春を事業の完成目標としている。駅の東口はすでに複合商業施設であるフォルテ摂津が建設され、バスターミナルも整備されたが、西口側は用地買収も完了しておらず、少しづつ工事が進んでいる状況である。

用地買収と工事計画にともない、前章でも触れたように、西口周辺では小規模な発掘調査が数回にわたって行われている。結果、小規模な遺跡が当該道路周辺に点在するという状況にあった。前年度調査区は千里丘1丁目遺跡第2地点として、今年度調査及び試掘調査地も千里丘1丁目遺跡第3地点として、調査終了直後は登録されていた。しかしながら継続して行われている調査成果を照合したところ、一連の遺跡群は中世の集落・耕作跡を中心とした同様の性格を持つ遺跡であることが確認された。現存する地形を確認するため今回の調査区周辺の測量調査を行い、古地図・地籍図類の検討及び発掘・試掘調査で得た知見と合わせて原地形の復原を試みたところ、南北方向の谷地形を復原することが可能であった。この南北方向の谷筋を中心とする範囲において、後世の耕作などの開発による削平を免れ、遺跡が残存したものと考えられる。

以上の結果を摂津市教育委員会と協議の上、千里丘2丁目遺跡第2地点、千里丘1丁目遺跡第2地点及び第3地点の既存の3遺跡を、1遺跡として一体的に取り扱い、包蔵地範囲を拡大することを決定した（図1参照）。平成19年6月28日、千里丘遺跡として新たに登録を行った。今後も周辺の調査が進むにつれて、千里丘周辺に点在する遺跡の範囲確認・名称整備の検討を続けて行いたい。

（小川 裕見子）

第3章 平成18年度調査区調査成果

第1節 基本層序

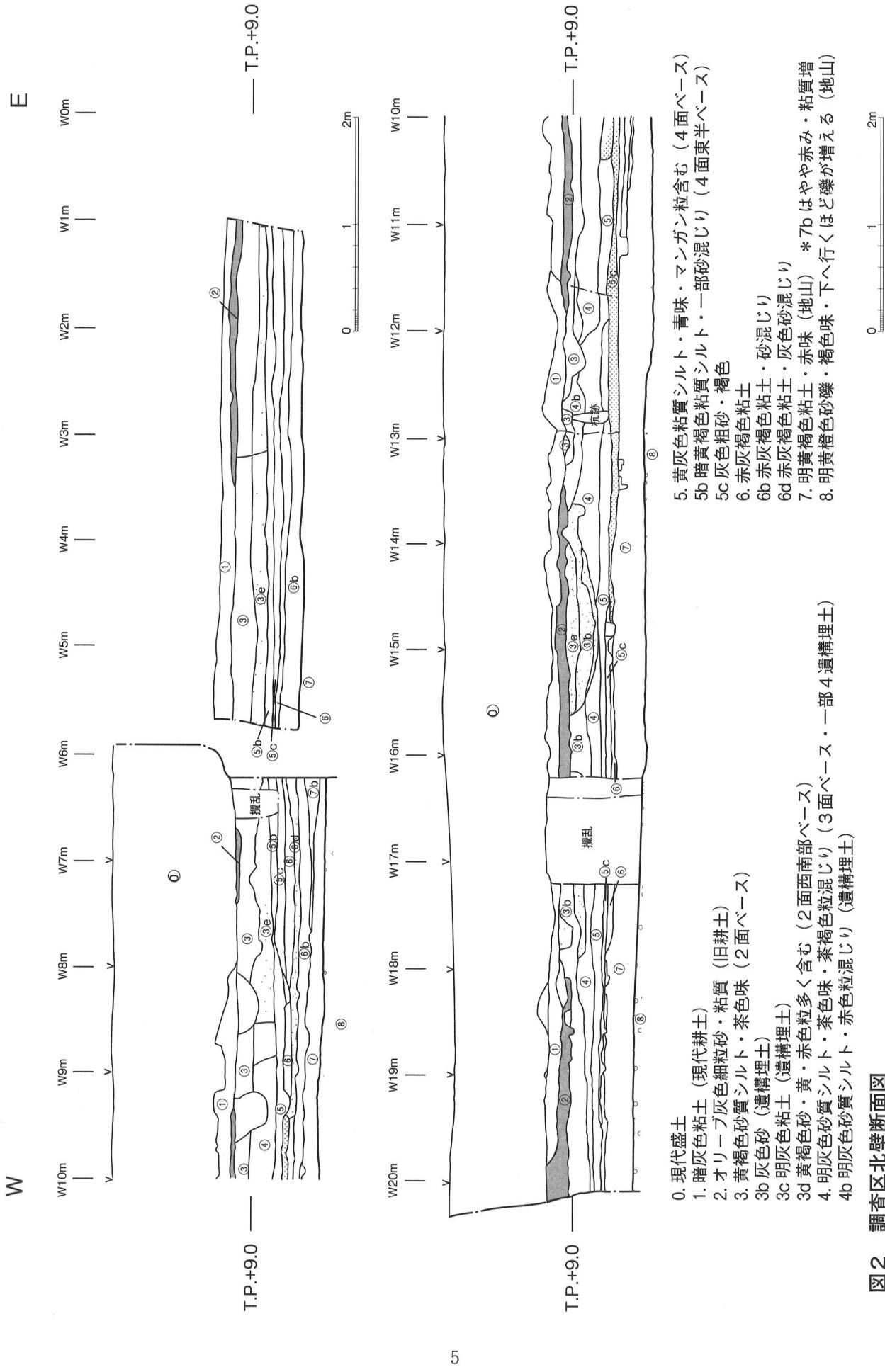
調査の結果、平成18年度調査区において発見した遺跡は西側に隣接する平成17年度調査の成果と連続するものであり、同一の複合遺跡の範囲が拡大されることを確認した。基本層序は10層に分けることができ、さらに細分が可能なものはアルファベットで枝番号をつけた。遺構が存在するのは平成18年度調査区では6層および7層の上面までであり、7層より下は地山に相当する（図2・3調査区北・西壁断面図参照）。主だった遺構面は合計で4面存在した。各々、第2面は3層、第3面は4層、第4面は5層、第5面は6・7層の上面で検出した（第1面は現代である）。今回の第2面が平成17年度調査区における第1遺構面に、第4面が第2遺構面に、第5面が第3遺構面に各々相当する。基本層序は表1の通りである。今回の調査における第3面は遺構の存在が希薄な面であり、平成17年度調査区において主だった遺構面としては検出されなかつた。また、調査区の地形が北東から南西にかけて緩やかに上るように傾斜しており、第4・5面（中世以前）の遺構は調査区西端の一部分では削平されていた。南西隅の一部では特に搅乱が著しかつた。

調査区は低位段丘層の上に位置しているが、現代の搅乱による削剥が著しかつた調査区南壁の西端付近では大阪層群に相当すると思われる礫層を観察することができた。

調査終了後に、調査区の北東部及び北西部よりサンプル土を持ち帰り、サンプルを洗浄し土中の鉱物を同定するため実体顕微鏡にて観察を行つた。そのうちで、6層に相当するサンプルからは、比較的多量の褐色火山ガラスが（Hタイプ・Cタイプともに^{*)}）が存在し、他のサンプルと比べて火山ガラスの含有量が圧倒的に多かつた。褐色ガラスは、鬼界アカホヤ火山灰（約7,300年BP）に特徴的な含有物である。また、下層の7層においては、褐色ガラスとともに、角閃石の単結晶が多く観察された。角閃石は、近畿地方で確認されている火山灰のなかでは、阪手火山灰（約1万数千年BP）に特徴的な鉱物である。この結果、各々、6層にはアカホヤ火山灰、7層には阪手火山灰が含まれている可能性がある。しかしながら、どちらもいわゆる火山灰層として認定できるほど圧倒的な量の火山碎屑物を含んでいたわけではなく、混ざりなく排他的に一種類の火山灰のみが存在したわけではない。地層中の堆積物に火山灰を含んでいたという状況であり、絶対年代を決定するにはいささか根拠が弱いため、ここでは、各々の火山灰の存在を示唆し、当該年代の堆積層である可能性がある、と言うに留めたい。

10層においても、褐色ガラスが観察された。これは量や他の含有鉱物を考慮すると、アカホヤ火山灰がこの10層の堆積時に降灰したわけではなく、後世の攪拌により混入したものである。10層において非常に特徴的であったのは、他のサンプルと比べて、新鮮な長石の結晶が極端に少ない。このことより、当該層は際立って古い年代に形成された層であるといえる。

平成17年度調査区において、縄文時代早期から草創期のものと思われるサヌカイト剥片の集



積が出土したのは、7層の上部においてである。洗浄及び実体顕微鏡観察を行ったサンプルは、出土層に相当する地層から採取したものであり、出土地そのものから採取したものではないため断定はできないが、サヌカイト剥片出土層はアカホヤ火山灰の降灰以前に堆積した可能性がある。

(小川)

*火山ガラスをHタイプ(扁平型)、Cタイプ(中間型)、Tタイプ(多孔孔質型)の3種類に分類する吉川(1976)の分類による。

**地層の観察については趙哲済氏・小倉徹也氏(大阪市文化財協会)、火山灰の観察については小倉徹也氏の

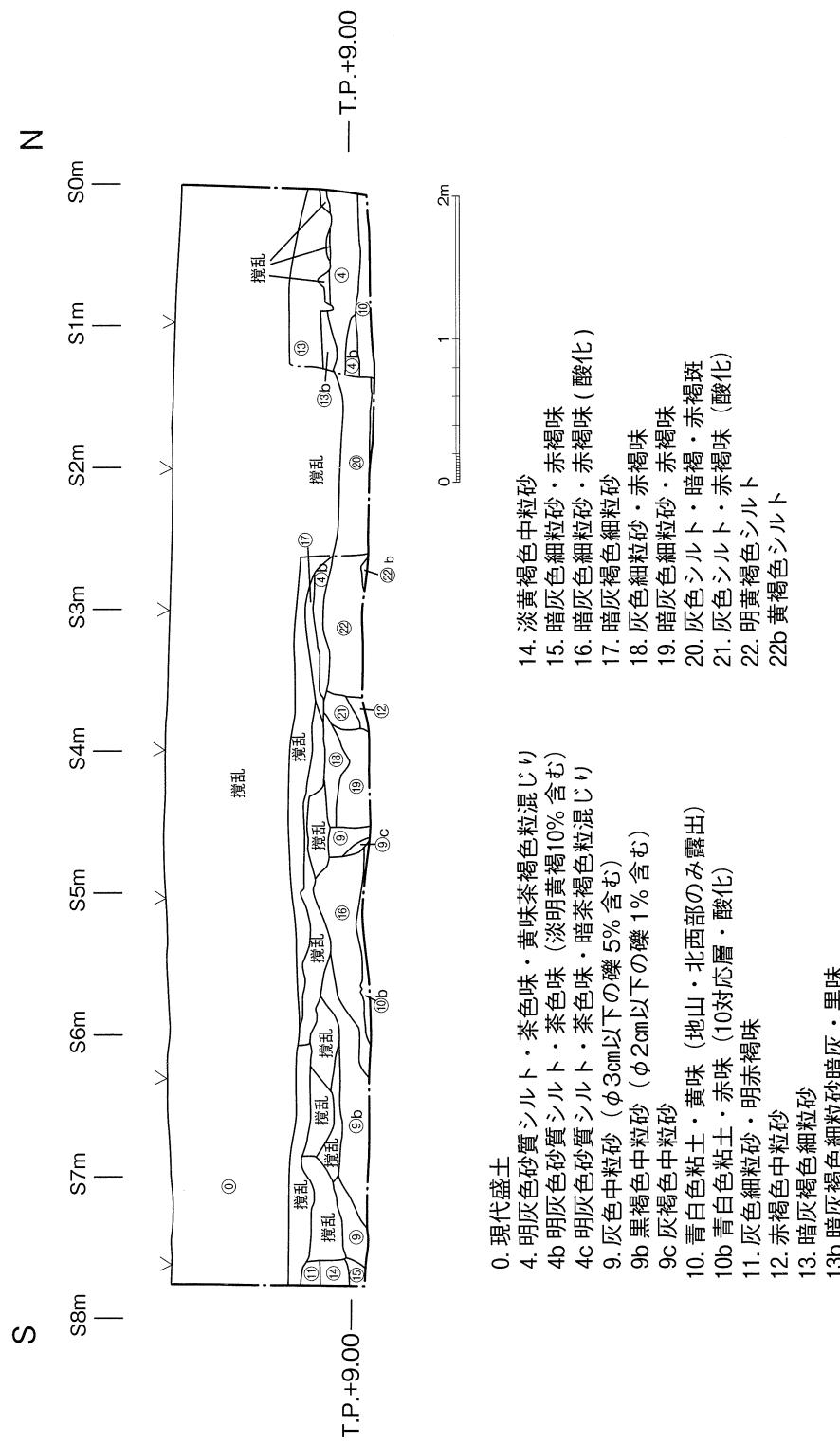


図3 調査区西壁断面図

表1 千里丘遺跡層序表

千里丘遺跡基本層序	岩相	層厚(cm)	遺構	おもな遺物	時代
第0層	現代盛土	90-110			現代
第1層	暗灰色 粘土 (現代耕土)	0-15			現代
第2層	オリーブ灰色 繊粒砂 粘質 (旧耕土)	5-20			現代
	黄褐色 砂質シルト 茶色味 (2面ベース)	15-25	鋤溝・溝・土坑・ピットなど	陶磁器片	近現代～近世
第3層	灰色 砂 (遺構埋土)	10-15			
	明灰色 粘土 (遺構埋土)	ab.10			
	黄褐色 砂 黄・赤色粒多く含む (2面西南部ベース)	10-20			
第4層	明灰色 砂質シルト 茶色味 茶褐色粒混じり (3面ベース一部4面遺構埋土)	5-20	鋤溝・溝・土坑・ピットなど	陶磁器・瓦器・土師器片など	近世～中世末
	明灰色 砂質シルト 赤色粒混じり (遺構埋土)	≥15			
第5層	黄灰色 粘質シルト 青味 マンガン粒含む (4面ベース)	ab.10	ピット・鋤溝など	土師器・瓦器・陶磁器片	中世
	暗黃褐色 粘質シルト 一部砂混じり (4面東半ベース)	ab.5			
	灰色 粗砂 褐色	ab.5			
第6層	赤灰褐色 粘土	ab.10	溝・ピット・落ち込みなど	土師器・黑色土器片	古代
	赤灰褐色 粘土 砂混じり	ab.20			
	赤灰褐色 粘土 赤色砂混じり	ab.5			
第7層	明黄褐色 粘土 赤味 (地山) (*7bはやや赤味・粘質増し)	15-25		(H17年度調査区より) サヌカイト剥片	縄文早期～ 草創期
第8層	明黄褐色 砂礫 褐色味 下へ行くほど疊が増える (地山)	≥10			
第9層	灰色 中粒砂 碓合む (地山)	ab.20			
第10層	青白色 粘土 黄味 (地山) 北西部のみ露出	≥10			

*第8-9-10層は各々調査区の別の位置で検出されたため、この順に堆積が観察されたわけではない。また、掘削深度の最下部において検出されたため、各々の層厚を確認できていない。

ご教示をいただいた。

[参考文献]

宮地良典・田結庄良昭・寒川旭 2001『大阪東北部地域の地質』地質調査所

吉川周作 1976「大阪層群の火山灰層について」『地学雑誌』第82巻 第8号 pp.497-515

第2節 各遺構面の調査成果

今回の調査では合計5面の遺構面を確認した。土層断面図では2層上面から6層上面までが該当する。調査区は西から東に下る傾斜地上に位置している。第1・2遺構面において検出した遺構は、東半分は近世以降の遺構、西半分は地山の傾斜による微高地にあたるため、遺構面の削平も進んでおり、現代の遺構となっている。第3面以下の層は基本的に安定しており、全域に近世以前の遺構面が存在した。

第1面 近世以降の遺構

第1面の遺構は2層上面で検出した。随所に現代の搅乱が及んでいるが、溜池もしくは流路とみられる遺構や土坑を遺構面全面で検出した。

溜池／流路は調査区の約東半分を占める。埋土が類似することや検出位置などから、前報告(大阪府教育委員会 2006)の溜池／流路1及び2と同一の遺構と考えられる。

土坑は主に調査区西半部で検出した。埋土の状況より土坑1～6、7、8～12の3群に大別

できる。土坑1～6の埋土は明灰色粘質土ブロックを含む灰褐色砂質土である。調査区西部で検出しており、他の土坑よりも大型である。土坑7の埋土は黄褐色土ブロックを含む暗青灰色土である。調査区北西部で検出した。土坑8～12の埋土は明灰色粘質土ブロックを含む灰褐色土である。調査区中央部で検出した。第1面からは陶磁器が出土した。

第2面 近世の遺構

第2面の遺構は3層上面で溝、ピット、土坑、鋤溝が密集して検出された。

溝は北東・南西方向に延びる。ピットは組み合うものがみられなかった。鋤溝は当面での耕作の痕跡を示す遺構である。溝の流路方向と同様の北東・南西方向及び、それにはほぼ直交する北西・南東方向の2種類が確認できた。第2面の遺物としては、SD04から陶磁器口縁部が出土した。

第3面 中世末の遺構

第3面の遺構は4層上面で溝、土坑、ピット、鋤溝を検出した。遺構の数は第2面よりも少ない。溝及び鋤溝の方向は第2面と同様である。つまり、溝は北東・南西方向に延び、鋤溝は北東・南西方向及び、それにはほぼ直交する北西・南東方向の2種類が確認できた。第3面からは土師器、黒色土器、瓦器、陶磁器が出土した。

第4面 中世の遺構

第4面の遺構は5層上面で掘立柱建物跡、ピット、鋤溝を検出した。

掘立柱建物跡は合計5棟存在した可能性があり、主軸は北東・南西方向である。これは後述する鋤溝や第3面の鋤溝と平行関係にある。5棟の内、調査区北西隅に位置する1棟は他とは異なり、ほぼ正東西南北方向に沿って存在する。

鋤溝は北東・南西方向に走っており、掘立柱建物跡や第3面の鋤溝と平行であるが、調査区西侧においては他と比べて若干東西方向優位に振れる。第4面からは土師器、瓦器、陶磁器が出土した。

第5面 古代の遺構

第5面の遺構は6層上面で溝、掘立柱建物跡、ピット、落ち込みを検出した。

ピットは一部を除き、各々の形態や位置関係から掘立柱建物を形成していたものと判断する。建物の正確な数は不明であるが、数棟存在していたものと考える。第5面からは土師器、黒色土器などが出土した。

(田村 隆明)

[参考文献]

大阪府教育委員会 2006『千里丘遺跡群発掘調査概要』

図4 第2遺構面 平面図

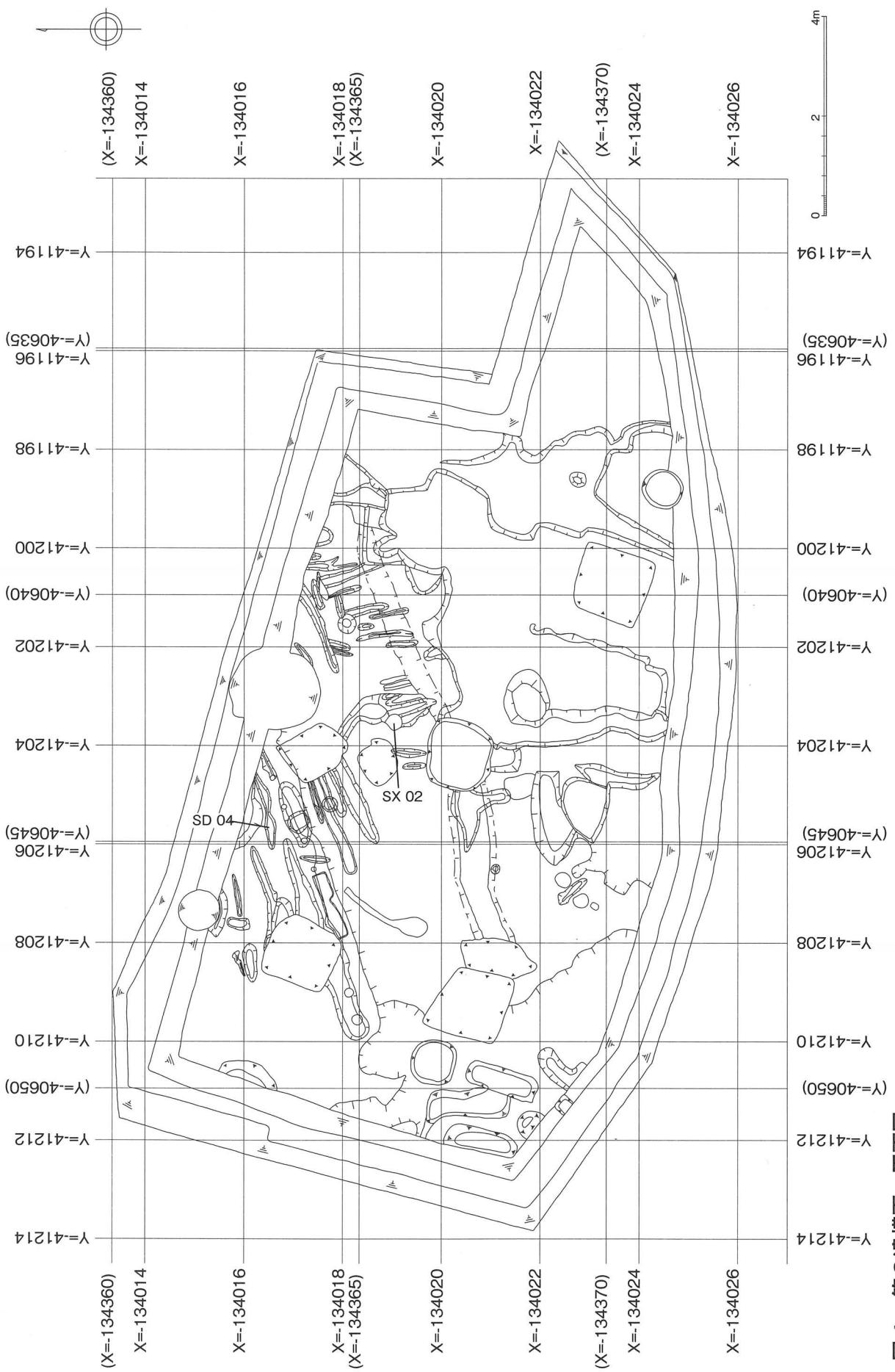
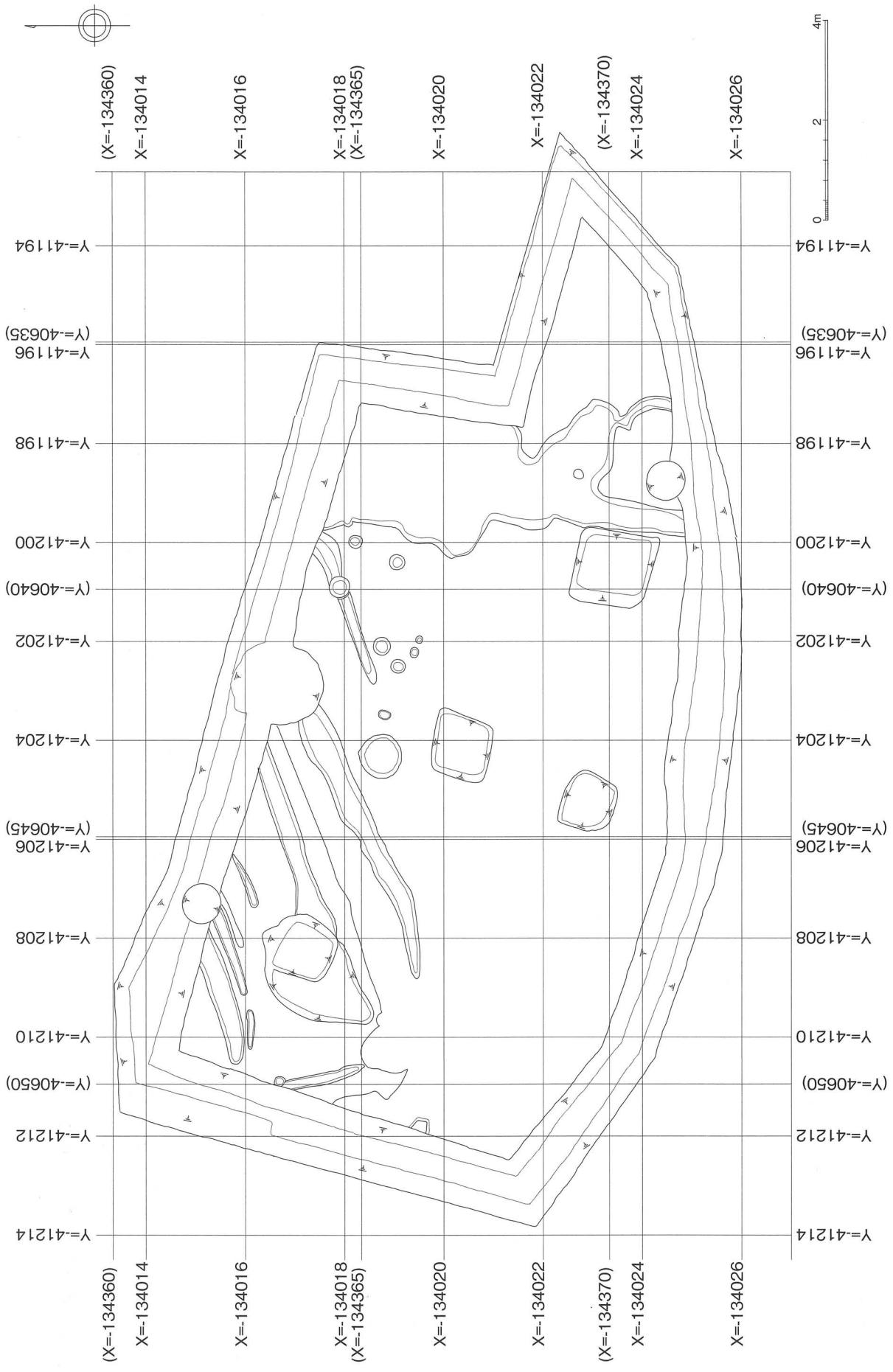


図5 第3遺構面 平面図



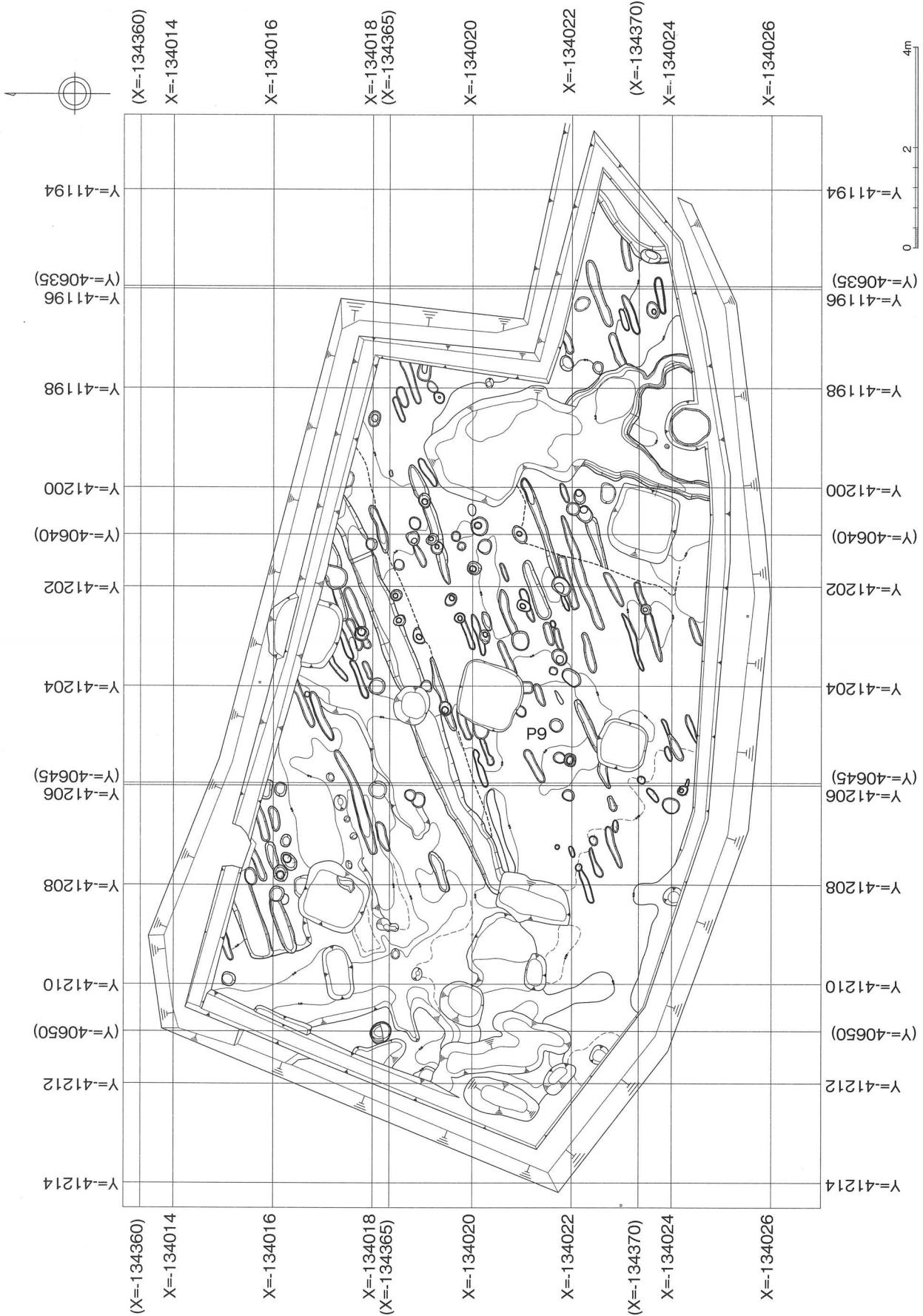
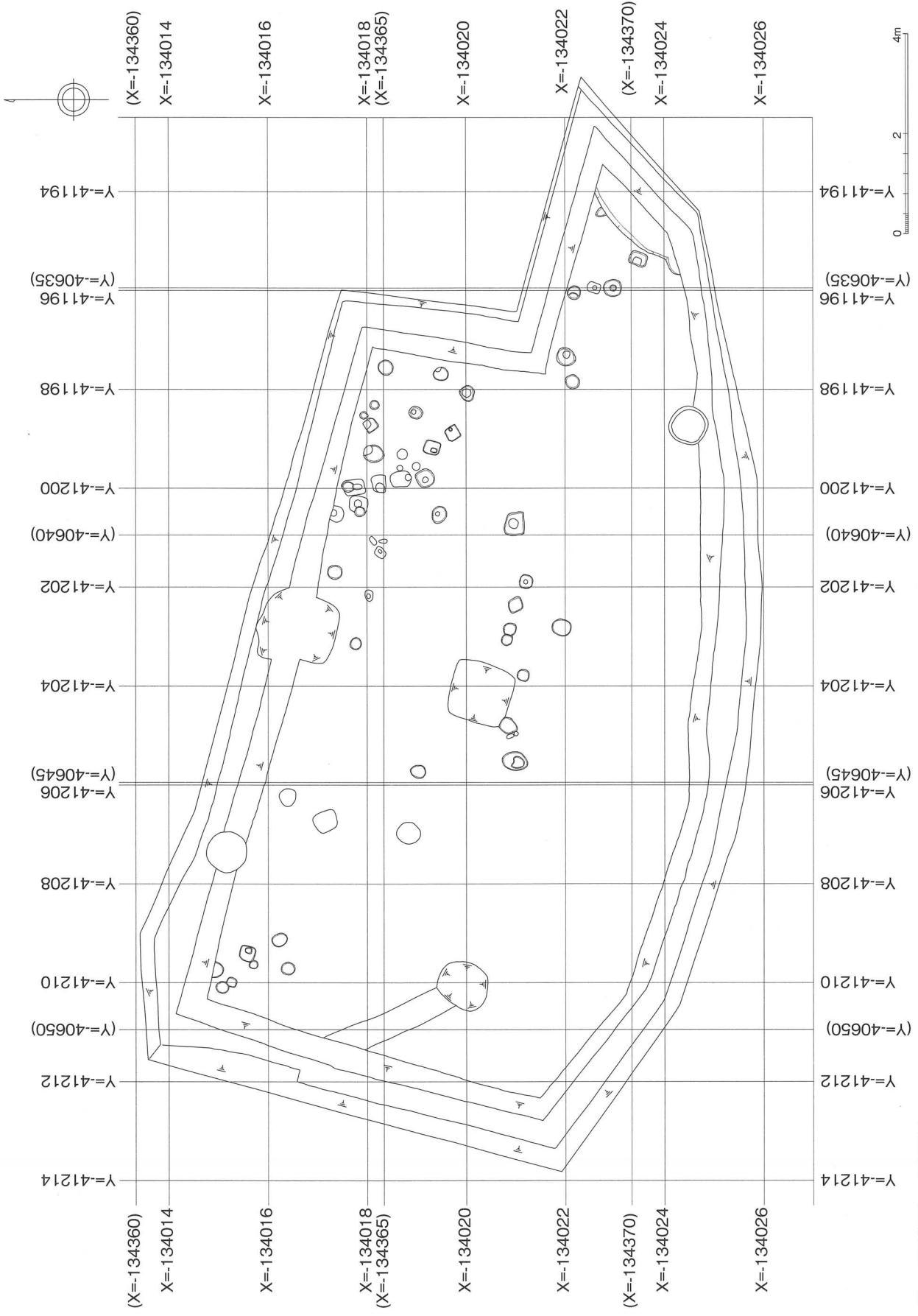


図6 第4遺構面 平面図

図7 第5遺構面 平面図



第3節 出土遺物

今回の調査で出土した遺物は、中世から近世にかけての土器類が多い。土師器、瓦器、陶磁器などの遺物が主である。

土師器、瓦器は、ともに第3面以下の各面から出土しているが、破片のみで残存状態の良いものは少ない。

1～3はともに土師器の皿で、口縁部の破片である。1は外面にナデ、内面には沈線がめぐる。調査区中央南第4面のP9より出土した。2・3は第4面下から出土した。それぞれ内面、外面にナデが見られる。3には両面に一部ススが付着しており、内面には指頭圧痕も認められる。

4～6は瓦器である。4は口縁部の破片で、調査区北西の側溝から出土した。皿と思われる。5・6は高台付底部の破片である。5は調査区の第5面南西から出土した。高台内側に削った痕跡が見られ、内面には沈線が2条認められた。6は調査区第3面北西から出土した。全面白色で、風化している。

この他、第3面・5面で両黒の黒色土器が出土しているが、図化することが可能なものはなかった。

調査区東端第4面では、擂り鉢の破片7が出土した。陶磁器で櫛目が幅1.8cmの間に6条確認できる。また、調査区第4面下の中心部で出土した8は擂り鉢の口縁部と思われる。

陶磁器類は第1面～4面にかけて出土している。中世及び近世のものと思われる。9～11は口縁部、12～15は高台付底部、いずれも破片のみである。10は調査区第2面の北西溝SD04から出土し、11は10と同じ地区の第3面下から出土した鉢の口縁である。12は東側溝から出土した。高台部には削った痕がある。15も10と同じ地区において第1面から出土する。内面に重ね焼きの痕と思われる、丸く釉薬の掛かっていない部分がある。14は調査区西端第2面のSX02から出土した。体部に模様が描かれており、高台部分に1条の線がめぐる。16は、第3面下から出土した。幅1cmの間に4条の沈線が見られる。蓋9は機械掘削時に、13は攪乱から各々出土した。

その他、調査区南西の一層から約2cmの土製の仏塔らしき形をしたもののが出土した。用途は不明だが、仏具関係のものであると思われる。また、今回の調査では、前回調査のようなサヌカイト製の石器は出土しなかった。

(堂ノ本 智子)

[参考文献]

大阪府教育委員会 2006『千里丘遺跡群発掘調査概要』

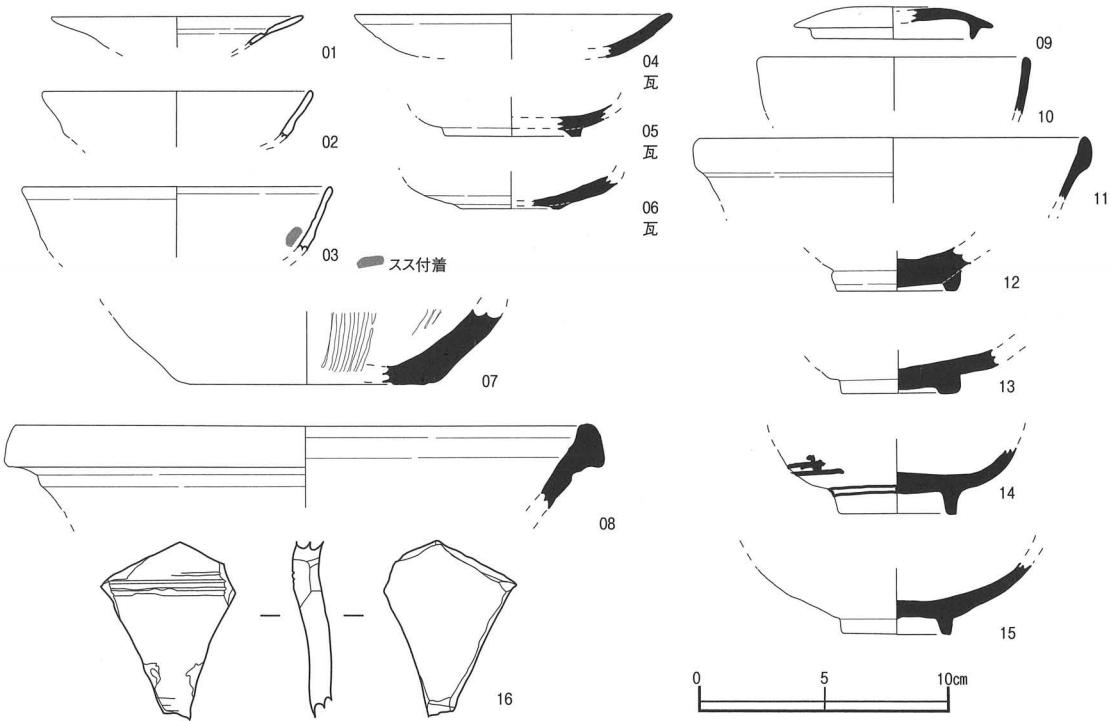


図8 平成18年度調査区出土遺物

表2 平成18年度調査区出土遺物観察表

番号	登録番号	出土地点	器種	種類	時代	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	調整			色調			胎土	焼成	実測番号			
									外面			内面								
									外	内	底	外	内	断						
1	070	W20S (S半) P9 ピットなし (?)	皿	土師器	—	(10.0)	—	残存高(1.2)	ナデ	沈線	—	茶褐色(濃)	茶褐色	茶褐色	密	良	009			
2	083	9-8より東側から 4面下	皿	土師器	—	(10.8)	—	残存高(1.9)	ナデ	ナデ	—	黄褐色	薄い肌色	肌色から白い灰色	密	良	007			
3	083	9-8より東側から 4面下	皿	土師器	—	(12.2)	—	残存高(2.5)	ナデ スス付着	ナデ 指頭圧痕 スス付着	—	灰白色 (一部スス付着)	灰白色(薄)	灰白色(薄)	密	良	006			
4	026	W10N 側溝	皿	瓦器	—	(12.6)	—	残存高(1.2)	ナデ	不明	—	黒色	暗灰色	灰白色	密	良	101			
5	091	W20S (N端) 5面確認トレンチ	椀	瓦器	—	不明	高台径(5.4)	残存高(1.2)	不明	沈線	ケズリ	黒色に近い灰色	灰色	白灰色	密	良	003			
6	060	W20N (W端) 3面	椀	瓦器	—	—	高台径(4.4)	残存高(1.2)	不明	不明	不明	白色 茶褐色	白色	白色	密	良	102			
7	016	W05	すり鉢	陶器	—	—	(10.4)	残存高(2.9)	不明	不明	不明	茶褐色	灰色	暗褐色	密	良	103			
8	086	W20S (N半) 4面下	すり鉢	陶器	—	(23.0)	—	残存高(3.3)	ナデ	不明	不明	青味の灰色 口縁部灰色(黒色味)	青味の灰色	青味の灰色	密	良	008			
9	001	機械掘削	蓋	陶器	—	(6.4)	—	残存高(1.8)	施釉	施釉	—	緑灰色(釉薬)	緑灰色(釉薬)	薄い緑灰色	密	良	004			
10	040	W20N (W端) 2面(SD4)	椀	陶器	—	(10.6)	—	残存高(2.3)	口唇部ナデ 施釉	施釉	—	灰釉	灰釉	灰白色	密	良	105			
11	061	W20N 3面下	鉢	陶器	—	(15.4)	—	残存高(2.5)	施釉	施釉	—	緑味の白色(釉薬)	緑味の白色(釉薬)	灰白色(薄)	密	良	005			
12	012	W10N 東側溝	椀	陶器	—	—	高台径(4.8)	残存高(1.7)	施釉	施釉	施釉 ケズリ	赤褐色(黒味)	白に近い灰色	黒味の灰色から 黒味の赤褐色	密	良	001			
13	058	東南スミ搅乱	椀	陶器	—	—	高台径(4.7)	残存高(1.7)	一部施釉 ケズリ	施釉	貼付け高台	釉薬	黄白色 茶褐色混じり	黄白色 茶褐色混じり	密	良	100			
14	049	W20S (W端) SX02	椀	磁器	—	—	高台径(4.8)	残存高(2.6)	施釉	施釉	施釉	釉薬	白色	密	良	104				
15	025	W20N 1面	椀	陶器	—	—	高台径(4.4)	残存高(2.8)	施釉	施釉 重ね焼き痕	—	極薄い跡(釉薬) (一部薄い褐色)	極薄い跡(釉薬) (一部薄い褐色)	白色	密	良	002			
16	079	3面下	盃／鉢	須恵器	—	—	—	残存高(7.1)	4条の沈線 ナデ ヘラナデ	回転ナデ	—	暗赤色	灰色	?	密	良	106			

※() 内数値は反転復元後の数値

第4章 千里丘遺跡平成17年度調査出土土器について

須恵器・土師器（図9）

須恵器（図9、1～5）

1は口径が17.5cmに復元できる鉢である。まっすぐに口縁端部まで伸び、端部先端には面を持つ。器壁は磨耗しており調整は不明瞭であるが、おそらく内・外面ともにナデが施されていると思われる。時期は13世紀頃と考えられる。

2は、すり鉢と考えられる小破片である。口径の5%ほどしか残存していないものの、口径はおよそ16cm程度に復元できる。口縁端部は、端部を折り返すか粘土紐を継ぎ足すことにより肥厚し、ナデ調整によって上下につまみ出されている。内・外面ともにナデで調整がなされる。口縁部の形態などから、13世紀から14世紀頃の遺物であると考えられる。

3は、復元口径が18.9cmの鉢と考えられる破片である。口縁部までやや内湾気味に立ち上がり、口縁端部は、端部を内側に折り返すことで肥厚する。内・外面ともにナデ調整が施される。4は、壺の口縁部である。口径は10.8cmに復元でき、調整は内外面ともにナデ調整である。口縁部は、大きく外反しながら伸び、端部に上下方向の面を持つ。この面はナデ調整により作り出されたものである。11世紀から12世紀に属する遺物と考えられる。

5は、口径の15%が残存する甕の破片である。口径は15.2cmに復元できる。外面はナデ調整のうちにタタキが施され、タタキ痕が残っている。内面はナデ調整がみられる。頸部から口縁部まで外反しながら伸び、端部は外側に丸く肥厚する。断面の観察から、おそらく端部を折り返すことで丸くおさめているものと考えられる。このような形態の口縁端部を持つ甕は6世紀から7世紀にみられるものである。ただ、口径が15cm程度と小さいことを考え合わせれば、6世紀代のものと考えるのが妥当だろう。

いずれの資料も口縁部のみが残存する小片であり、詳細はほとんど不明である。所属時期も断定しがたいが、6世紀から10世紀という幅広い時期に属するものであろう。産地を推定することが可能なすり鉢といった器種も存在するが、残存状況が悪く不明である。

土師器（図9、6～9）

6は、残存率が口径の5%と悪いものの、口径は14.5cmほどに復元できる甕である。口縁部は、頸部下半までは直立し、そこから大きく外反して端部にいたる。端部は丸くおさめられ、内・外面ともにナデ調整が施される。口縁部形態の特徴から、田辺編年のTK209型式期頃（6世紀末から7世紀初頭頃）のものと考えられる。
(注1)

7～9は、皿の破片である。7は口径8.3cm、8は口径11.3cm、9は口径15.3cmに復元できる。いずれも焼成は不良である。7は底部が欠損しているものの体部下半から口縁部にかけて残存している。体部下半からゆるやかに外反しながら口縁部にいたる。口縁部下端に指オサエによる屈曲がみられる。内面調整は板ナデ、外面調整は指ナデによってなされる。8は口縁部のみが残存

しており、7と同様に口縁部下端で屈曲し、ゆるやかに外反しながら端部にいたる。調整は7と同様だが、7よりも口径が大きく器壁が厚いのが特徴である。9は口縁部のみが残存している。7・8と同様に口縁部下端に屈曲がみられるが、他の2点と比較すると屈曲がより口縁部に近い位置にみられる。調整は7・8と同様である。所属時期は13世紀から14世紀にかけての時期であると考えられる。

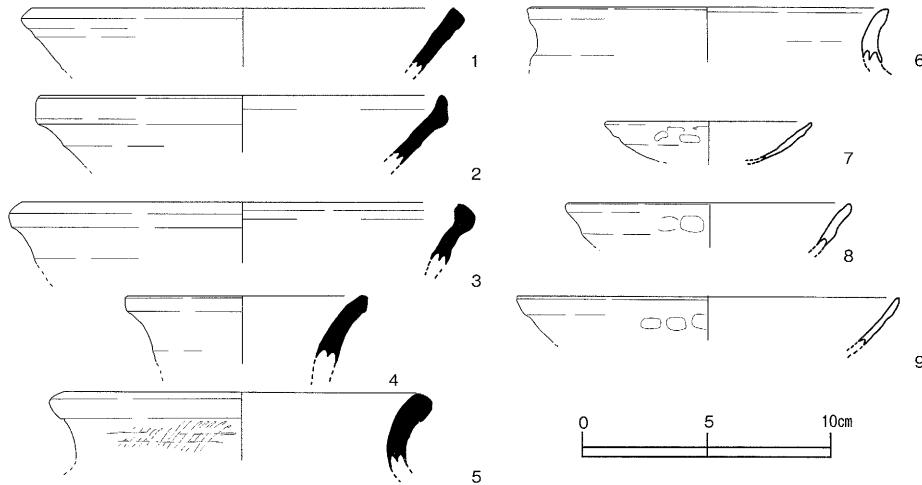


図9 出土須恵器・土師器

青磁・白磁・陶器類（図10）

白磁（図10、10）

10は口径が15.4cmに復元できる白磁碗で、白濁した緑色を呈する。口縁部のみが残存する小片である。口縁部は三角形を呈しており、11世紀から12世紀の時期に比定できる資料である。産地については不明である。

青磁（図10、14・15）

14は口縁部から底部までが残存しており、口径が10.0cmに復元できる青磁杯である。口縁部は強く外反し、底部には高さ0.75cmの輪高台を持つ。時期はおよそ10世紀から13世紀頃のものと考えられる。

15は復元口径10.1cmの青磁碗である。ゆるやかに外反しながら口縁部にいたり、口縁端部はわずかに内傾する。14と同じく、

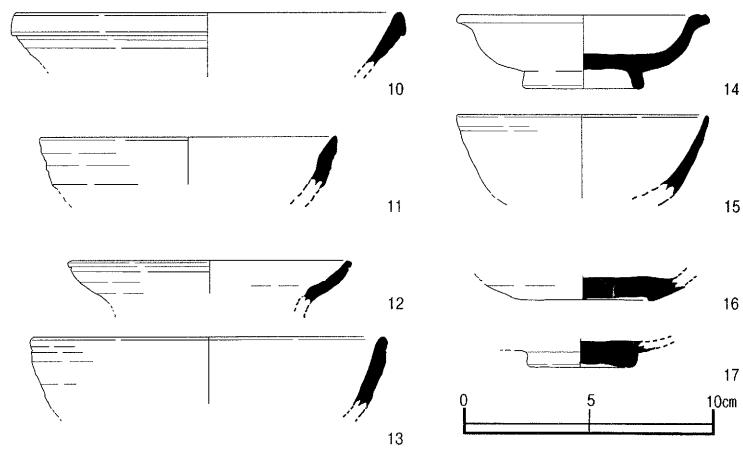


図10 出土陶磁器

10世紀から13世紀に位置づけられる資料である。

いずれも産地については不明である。

陶器（図10、11～13、16・17）

11は、口径が21.4cmに復元できる、緑色を呈する椀類の口縁部である。ゆるく内湾しながら口縁部にいたる。口縁部下端には1条の凹線がめぐっている。

12は壺か甕の口縁部と考えられる小片である。口径は11.2cmに復元できる。内・外面ともに緑色を呈する。内湾しながら立ち上がり、口縁部は丸くおさめられている。端部外面には1条の凹線がめぐっている。

13は復元口径が14.2cmの、椀口縁部の小片である。内・外面ともに褐色を呈する。口縁部下端でわずかに屈曲し、やや内湾気味に口縁部にいたる。

16は底部径が5.2cmに復元できる椀・皿類の底部である。体部は内・外面ともにナデ調整が、底部外面はヘラケズリ調整がなされている。底部外面には、おそらくヘラケズリの際に砂粒が動いたことによると考えられる沈線がめぐっている。

17は、蛇の目状の高台を持つ椀・皿類の底部である。底部径は4.8cmで、高台高は0.6cmである。外面は高台を整形するため、ケズリによって調整されている。

いずれの資料も詳細な時期比定は困難であるが、おそらく中・近世のものであろう。

土釜・瓦器（図11）

土釜（図11、18・19）

18は体部最大径が26.6cmに復元できる土釜である。焼成は不良で、淡褐色を呈する。体部は丸みを持ち、鍔部は外側に向かって短く直線的に伸びる。外面は鍔部直下にハケ目が見られ、指頭圧痕も残る。また、一部にススの付着もみられる。内面は板ナデが施される。口縁部・体部下半が残存しておらず、産地や時期の比定は難しいが、当該遺跡の立地条件を考え合わせれば摂津産である可能性が高いだろう。また、所属時期は鍔部が短く直線的に伸びることから、13世紀から14世紀頃のものであると考えられる。

19は体部最大径が16.2cmの瓦質土釜である。焼成は不良で、暗灰色を呈

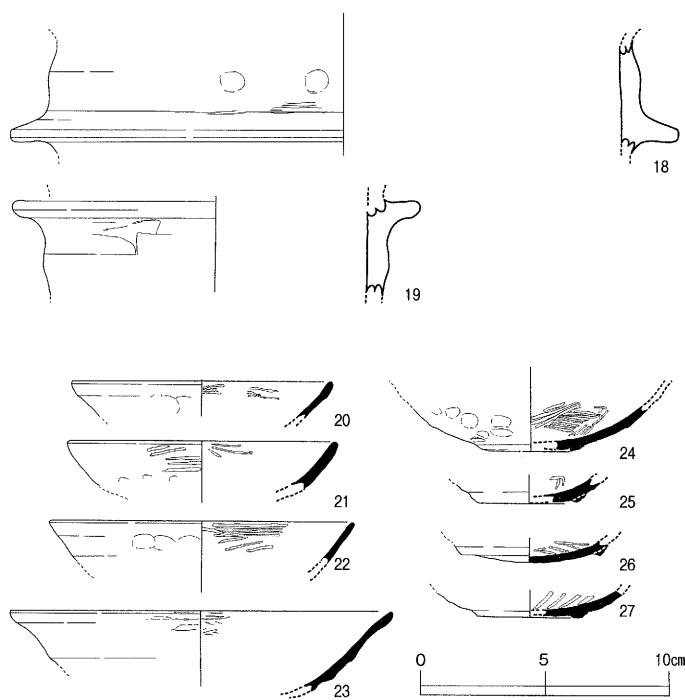


図11 出土土釜・瓦器

する。体部は直立し、鍔部直下に屈曲を持つ。鍔部は18と同様に、外側に向かって短く伸びる。器壁が磨耗しており詳細は不明であるが、外面にはヘラケズリが、内面には板ナデが施されている。18と同様に口縁部・体部下半が欠損しているため時期比定が困難であるが、鍔部の形態から13世紀から14世紀頃のものであろう。

瓦器（図11、20～27）

20は復元口径が10.4cmの瓦器碗の口縁部である。残存率は10%、焼成は不良である。口縁部下端で屈曲し、端部はわずかに内傾する。器壁は磨耗しており調整は不明瞭であるが、内面には水平方向のミガキが施されている。

21は口径が10.7cmに復元できる瓦器碗の口縁部である。焼成は不良で、暗灰色を呈する。体部はゆるやかに内湾しながら立ち上がり、口縁端部はわずかに内傾する。内外面ともにミガキが施される。

22は復元口径が12.1cmの瓦器碗口縁部の小片である。残存率は口径の10%程度で、焼成は不良、暗灰色を呈する。口縁部下端にわずかな屈曲を持ち、口縁端部までゆるやかに外反しながら立ち上がる。外面には板ナデ、内面には水平方向のミガキがみられる。また、外面には指頭圧痕が残る。

23は復元口径15.2cmの瓦器碗口縁部である。体部中ほどでわずかに屈曲し、外反しながら口縁部にいたる。口縁部はわずかに肥厚する。内外面ともにミガキが施されるが、器壁は磨耗しており詳細は不明である。

24は底部径が3.6cmに復元できる高台付瓦器碗である。残存率底径の10%程度で、黒灰色を呈する。高台はおそらく三角形を呈する輪高台であったと考えられるが、磨耗により形が崩れている。器形は丸みを持ちながら体部中ほどにいたる。外面には指頭圧痕が残り、内面にはミガキが施されている。

25は底部径3.9cmの高台付瓦器碗である。底部のみの残存であり全体像を知ることは難しいが、内面にはわずかにヘラミガキがみられる。三角形を呈する高台を持つ。

26は復元底部径が4.2cmの高台付瓦器碗である。高台は四角形を呈し、体部は丸みを持ちながら立ち上がるものと考えられる。外面調整は磨耗により不明であるが、内面にはヘラミガキがみられる。

27は底部径が5.5cmに復元できる高台付瓦器碗である。底部のみが残存する小破片である。高台は三角形を呈する。磨耗により外面調整は不明であるが、内面にはヘラミガキが施される。これらの瓦器碗は、口縁部の形態から、先行研究（白石1977b、橋本1977など）での指摘によって和泉型と分類されるものである。体部中ほどでわずかに屈曲すること、三角形の低い高台を持つこと、底部付近のヘラミガキが縦方向に施されていることから、13世紀前半頃に比定できる遺物と考えられる。

（田村 美沙）

表3 平成17年度調査区出土遺物観察表

番号	登録番号	出土地点	器種	種類	時代	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	調整			色調			胎土	焼成	実測番号
									外面	内面	底部	外面	内面	断面			
1	00033	3N 6層上面	須恵器	壺・鉢	奈良～平安時代	(17.5)	—	残存高(2.9)	ナデ?	ナデ?	—	—	—	—	粗	良好	0024
2	0043	02019遺構内 6層	須恵器	すり鉢	中世	(16.2)	—	残存高(2.8)	ナデ	ナデ	—	明灰色	明灰色	明灰色	粗	良好	023
3	00046	1N(0100)遺構内 3e-f層	須恵器	鉢?	中世	(18.4)	—	残存高(2.6)	—	—	—	—	—	—			0027
4	00013	2S 2~3層	須恵器	壺	古墳～奈良時代	(10.0)	—	残存高(2.2)	ナデ	ナデ	—	暗灰色	灰白色	灰白色			0026
5	00070	CS 6層	須恵器	壺	古墳～奈良時代	(15.2)	—	残存高(2.9)	ナデ・タキ	ナデ	—	明灰色	明灰褐色	明灰白色			0025
6	0025	1S 1面 4層	土師器	壺	中・近世?	—	—	不明	不明	—	暗茶～淡赤褐色	淡茶～暗茶褐色	淡赤褐色	密	良好	0025	
7	0069	不明	土師器	皿?	中世	(8.3)	—	残存高(1.6)	指ナデ	指ナデ	—						018
8	0030	1N 4~5層	土師器	皿?	中世	(11.3)	—	残存高(1.1)	ナデ	ナデ	—				粗	不良	0020
9	0060	AN 6層	土師器	杯	中世	(15.3)	—	残存高(1.3)	ナデ	ナデ	—	白褐色	淡褐色～白褐色	淡褐色	密	不良	019
10	00036	2N(遺構外)	白磁	碗	中・近世?	(15.4)	—	残存高(1.7)	—	—			白濁色	灰白色		良好	011
11	0023	2S 1面 3e-g層	綠釉陶器	碗?	平安時代	(21.4)	—	残存高(1.7)	ナデ	ナデ	—				密	良好	016
12	0014	3N 3S 2~3層	陶器	壺・壺	中・近世?	(11.2)	—	残存高(1.3)	—	—						良好	015
13	00016	1S(1面01002内) 4a-b層	陶器	碗	中・近世?	(14.2)	—	残存高(2.7)	ナデ	ナデ	—	白褐～赤褐色	白褐～赤褐色	淡赤褐色		良好	013
14	0054	SD (02082模乱内)	青磁	碗	中・近世?	(10.0)	(3.2)	残存高(3.0)	—	—						良好	010
15	0028	01011遺構内	青磁	碗	中・近世?	(10.1)	—	残存高(3.2)	—	—						良好	012
16	011	1N 01001以降内 1面	陶器	大皿	中世	—	(5.2)	残存高(1.0)	ケズリ	—	ケズリ					良好	017
17	0050	NAあぜ上	陶器	碗	中・近世?	—	(4.8)	残存高(1.0)	—	—	ケズリ					良好	014
18	0071	DS 6層	瓦質土器	羽釜	中世	—	—	残存高(3.5)	ハケ目	指ナデ	—	淡茶色	淡褐色		粗	不良	0022
19	00041	AS(02001NS) 遺構内	瓦質土器	羽釜	中世	—	—	残存高(3.8)	不明	ケズリ	—	暗灰色	暗灰色	灰白色	粗	不良	0005
20	00051	NB(3側溝内) 6層	瓦器	碗	中世	(10.4)	—	残存高(1.4)	ナデ	ミガキ	—	白褐色	白褐色	白褐灰色	密		003
21	00041	1N 4層	瓦器	碗	中世	(10.7)	—	残存高(1.5)	ミガキ	ミガキ	—	暗灰色	暗灰色～淡灰色	灰白色	密	不良	002
22	00218	DS 6層	瓦器	碗	中世	(12.1)	—	残存高(2.1)	指ナデ	ミガキ	—	暗灰色	淡灰～暗灰色	白褐色	密	不良	001
23	00041	AS(2面)6層	瓦器	碗	中世	(15.2)	—	残存高(2.2)	ミガキ・ナデ	ミガキ?	—	暗灰色	暗灰色	灰白色	密		004
24	0004	1S(南側溝)	瓦器	碗	中世	—	(3.6)	残存高(1.8)	ナデ	ミガキ	不明	淡灰白色	黑灰色	淡灰白色	密	不良	006
25	不明	不明	瓦器	碗	中世	—	(4.0)	残存高(1.6)	不明	不明	不明						007
26	0065	CN 6層	瓦器	碗	中世	—	(5.5)	残存高(0.3)	不明	ミガキ	不明	淡灰色	暗灰色	淡灰色	密	不良	008
27	0041	AS(02001NS) 2面	瓦器	碗	中世	—	(4.2)	残存高(1.1)	不明	ミガキ	不明	灰白色	暗灰色	灰白色	密	良好	009

[主要参考文献]

* () 内数値は反転復元後の数値

- 近江俊秀 2000 「土器から見た古代末から中世の転換期について－大和・河内を中心として－」『中近世土器の基礎研究』 X V
- 菅原正明 1983 「畿内における土釜の製作と流通」『文化財論叢』
- 白石太一郎 1969 「いわゆる瓦器に関する二・三の問題」『古代学研究』 第54号
- 白石太一郎 1977a 「『瓦器』の生産に関する二、三の覚え書き」『古代文化』 第27卷 第1号
- 白石太一郎 1977b 「越智氏居館跡の土器－瓦器の終末年代に関連して－」『古代学研究』 第85号
- 鋤柄俊夫 1988 「畿内における古代末から中世の土器－模倣系土器生産の展開」『中近世土器の基礎研究』 IV
- 田辺昭三 1966 『陶邑古窯址群 I』 平安学園考古学クラブ
- 橋本久和 1988 「中世日用雑器類の分析」『大阪文化誌』 第2卷第3号
- 森島康雄 1995 「6. 瓦器碗」『概説 中世の土器・陶磁器』
- 森田 勉 1995 「大宰府出土の輸入中国陶磁器について－型式分類と編年を中心として－」『大宰府陶磁器研究－森田勉氏遺稿集・追悼論文集』
- 山本信夫 1995 「[2] 中世前期の貿易陶磁器」『概説 中世の土器・陶磁器』
- 横田賢次郎・森田 勉 1978 「大宰府出土の輸入中国陶磁器について」『九州歴史資料館研究論集』 4

第5章 まとめ

摂津市千里丘周辺では、市域の大部分は縄文時代前期末から中期に淀川水系の沖積作用によって形成された。そのため、淀川の川床や千里丘陵につながる市域北部からは、弥生時代を中心とした遺物が出土している。今回の調査区はJR千里丘駅西口前にあたり、平成17年度に調査が行われた千里丘1丁目遺跡第2地点の西側に隣接する。第2章でも触れたように、平成17年度及び18年度の調査成果をふまえて、千里丘1丁目遺跡第2地点・第3地点及び千里丘2丁目遺跡第2地点を併せて、改めて千里丘遺跡とした。各々の調査成果より、千里丘遺跡は縄文時代から近世にかけての複合遺跡であり、特に遺物・遺構の存在が顕著に見られるのは中世であることわかった。

今回の調査においても、近世、中世、古代それぞれの遺構面から鋤溝・溝などの耕作の痕跡と集落跡である柱穴の痕跡を検出した。遺物は極端に少ないが、それでも時期の推定が可能である瓦器の小片について、口縁端部の調整と暗文及び高台の退化具合から、中世の遺構面は12世紀後半頃の遺構面であると考える。古代の遺構面は、隅が丸まった方形の柱穴や黒色土器片の出土より、9世紀頃の遺構面であろう。

平成17年度調査区から西に行くにつれて、地形が高まり、遺構面の削平が著しくなる。平成17年度調査区と比べて今回の調査区は、中世の遺構密度は低かったが、古代の遺構面においては、調査区東半で集中的に検出したピットの密度は高く、残存状況も良好であった。今後調査は更に西側へ続く。地形が上昇するにつれて、遺構面の損壊はひどくなる可能性が推測されるが、遺跡の西限の確定のためと、削平をのがれた遺構が残存していることを期待して、更なる調査成果を待ちたい。

(小川)

*調査については、伊部貴雄（摂津市教育委員会）、田村隆明、田村美沙、前田俊雄、松村祐香、大向智子、堂ノ本智子、牧田梨津子他諸様諸氏のご協力を賜った。ここに記して謝意を表したい。

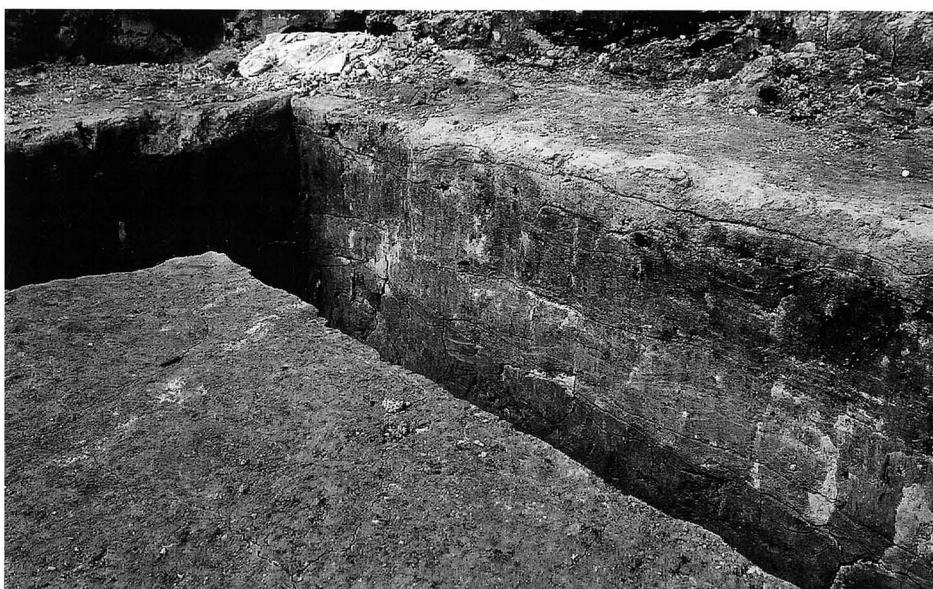
図 版



千里丘遺跡平成18年度調査区



千里丘遺跡平成17年度調査区



調査区北壁断面
(西部)



調査区北壁断面
(中央部)



調査区北壁断面図
(東部)



調査区南壁断面
(西部)



調査区南壁断面
(中央部)



調査区南壁断面図
(東部)



調査区全景 第3面
(西から)

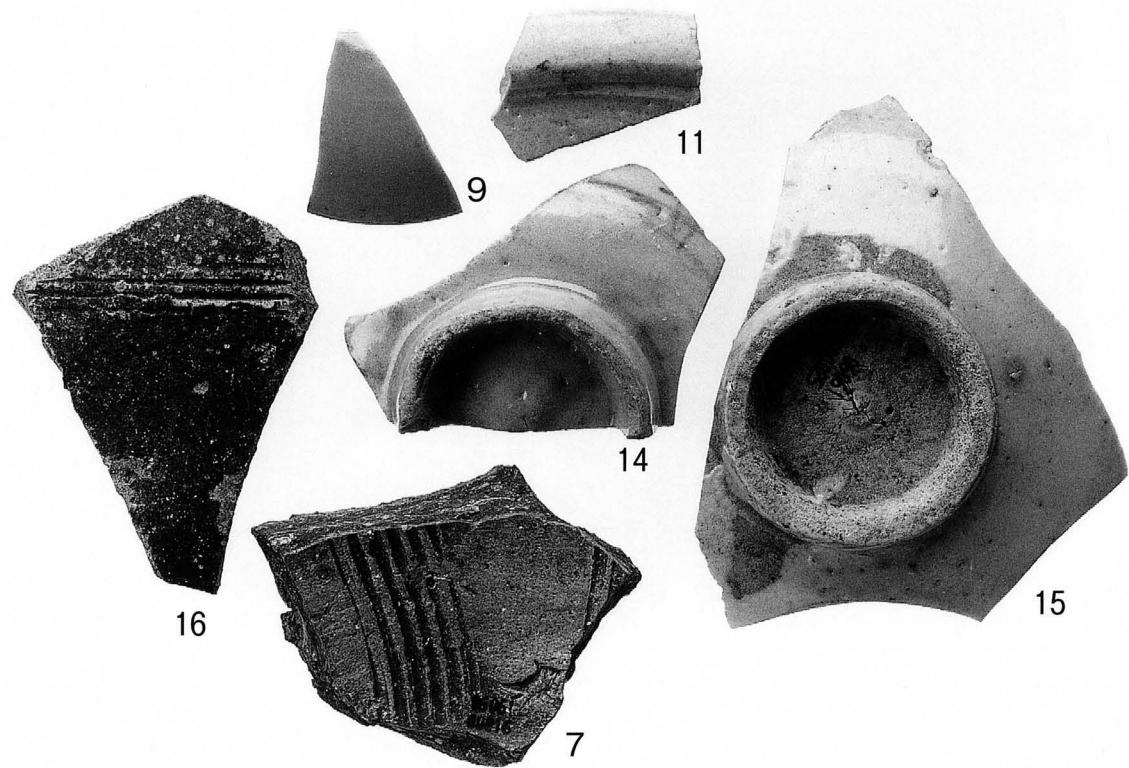
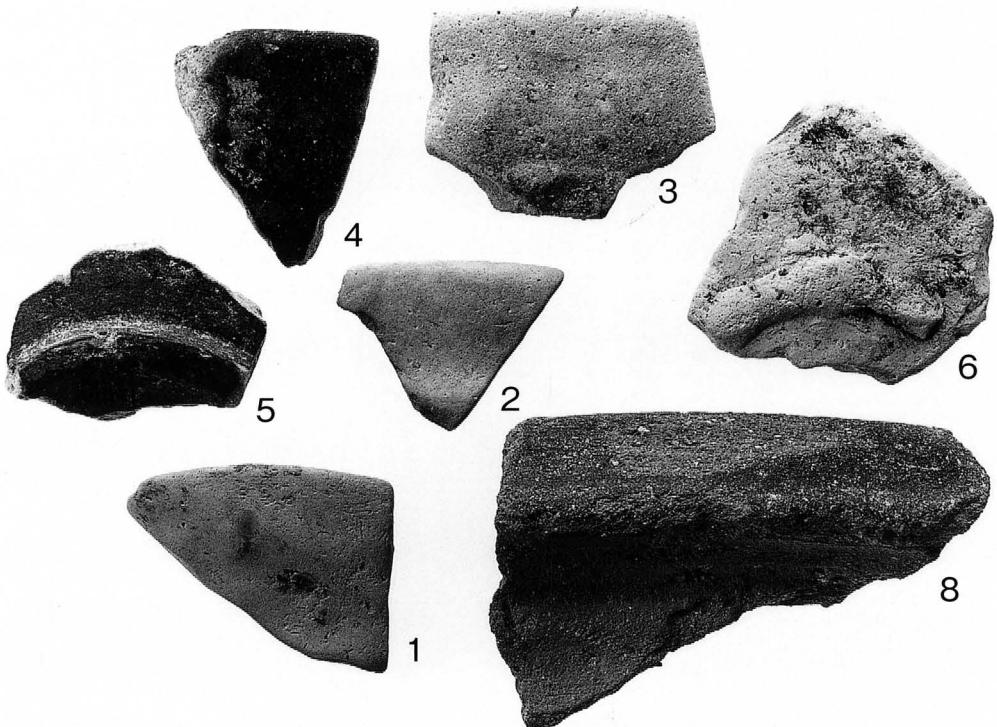


調査区全景 第4面
(西から)



調査区北東隅 近景
第5面

調査区全景 第5面
(西から)



報 告 書 抄 錄

ふりがな	せんりおかいせき						
書名	千里丘遺跡						
副書名	都市計画道路千里丘三島線道路改良事業に伴う調査						
巻次							
シリーズ名							
シリーズ番号							
編著者名	小川裕見子・田村隆明・田村美沙・大向智子・堂ノ本智子						
編集機関	大阪府教育委員会 文化財保護課						
所在地	〒540-8571 大阪府大阪市中央区大手前2丁目 TEL.06-6941-0351						
発行年月日	2008年3月31日						
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所 在 地	コ ー ド 市町村	北緯 遺跡番号	東經	調査期間	調査 面積	調査原因
せんりおかいせき 千里丘遺跡	せつつし 摂津市千里丘 1丁目	27224	20	34°47'16" 135°33'10"	2007年2月5日 ～ 2007年3月14日	170m ²	道路改良 事業

所収遺跡名	種 別	主 な 時 代	主 な 遺 構		主 な 遺 物	特 記 事 項
千里丘遺跡	生産遺跡、 住居、 集落	古代 中世 近世	古代 中世 近世	:流路、鋤溝、 ビット :流路、土坑、 溝、鋤溝群、 ビット :溜池/流路、 土坑、溝、 ビット	古代:土師器、須恵器、 黒色土器 中世:土師器、瓦器、 陶磁器	古代から中世にかけて、掘立柱建物群の柱穴と耕作の痕跡を検出した。
要約	平成17年度につづき、18年度もJR千里丘駅西口付近において発掘調査を行い、中世を中心とする耕作と住居の痕跡を検出した。同一性質の遺跡であると判断した周辺の2遺跡とともに、千里丘遺跡として登録し、遺跡の範囲拡大を決定した。					

千里丘遺跡

都市計画道路千里丘三島線道路改良事業に伴う調査

発行 大阪府教育委員会

〒540-8571 大阪市中央区大手前2丁目 TEL.06-6941-0351

発行日 平成20(2008)年3月31日

印刷 (有)ウエイク

〒582-0001 柏原市本郷5丁目6番25号 TEL.072-920-3488

